

OS-16 「知の身体性」

オーガナイザ： 諏訪 正樹（慶應義塾大学）

跡見 順子（東京農工大学）

本セッションは、諏訪正樹と跡見順子の共同企画で2013年度から三年連続で開催しているセッションである。知の形成において、物理的な身体が存在は大きな役割を果たす。身体があるからこそ、望むと望まないにかかわらず、世界と物理的な交わりをもつことになる。そして世界状況に対する動的な反応や新しい解釈を行うことになり、それに根ざして知が形成される。これを「知は身体性を有する」という。知の源泉は頭だけではなく身体にあるのだ。1980年代後半に芽生えた考え方である。

この考え方が提唱されてから四半世紀が経つにもかかわらず、身体性についての研究はまだまだ盛んではない。なにしろ、わからないことが多すぎる。

第一に、我々の身体は何を為しているのか？ 身体は暗黙性が高いことが多く、意識できることはほんの一握りである。第二に、知の形成というからには、身体知といえども、言葉が関わりをもつはずである。身体知の形成において言葉はどういう役割を果たしているのか？ これも難問である。科学的研究は、対象となるものごとを客観的に観察し、記述し、誰が見てもそうであると確認できる知見を見いだすことを是としてきた。科学的研究の方法論のみでは知の身体性の探究は難しい。

我々は知の身体性を解明する糸口を得ようと本セッションを開催している。上記のように、本セッションの問いは二つある。身体は「何を為しているのか」、知の形成において「言葉はどういう存在なのか」の二つである。

さて、「身体（からだ）をどう捉えるか」にはさまざまなレベルが存在する。その一例を列挙すると、

- 細胞の^{すみか}住処としての身体
- 細胞の集合体としての身体
- 言語で意識する存在としての身体
- 科学的に計測するものとしての身体
- 科学的に計測する運動体としての身体
- 生理学的反応と感覚と運動を統合する全体性としての身体
- 動作原理の集合体として身体
- 意識的・運動的スキルが体现する場としての身体
- 元気や健康が宿る場としての身体
- 言語の成り立ちを司る存在としての身体
- 言葉と共創関係をなす存在としての身体
- 感覚・感性のありかとしての身体
- コミュニケーションが成り立つ場としての身体
- 空間との間に生き生きとした関係を生む身体

などがあげられる。細胞から社会までさまざまな粒度・

レベルが存在する。現段階では、まとまりがないように見えるのは否定できない。しかし、各レベルにおけるものごとは階層的につながりをもつはずだという仮説のもと、互いに異分野の諏訪と跡見が共同で開催してきた。

生命科学者である跡見順子は、細胞レベルから身体性を考えてきた。半世紀前に文教育学部の保健体育科に入学したとき、人間とは何かを求めて医学部生理学から異動した恩師、渡邊俊男に出会った。言葉では空虚であった自己の存在の空虚さを、身体の中で機能する物質システムの凄さが埋めてくれたと感じた。人間の意識や行動は、細胞膜のナトリウムチャンネルが化学反応を電気現象に変化させることで生じる。身体を介しての「活動」によってのみスキルアップが獲得される事実が、これらの学習・適応を担う細胞の活動依存性の能力が生み出す。細胞が獲得してきたシステムの根幹に「細胞の身体性」がある。遺伝子情報ではなく、現場における制御系がスキルアップのみならず生死を決める。細胞の原理はまさに重心制御である。知の身体性の原点である。

しかし、知の身体性を支える細胞レベルでの機構が、上記の高度なレベル（意識や言葉）での認知にどうつながっているのかは暗中模索状態である。知の身体性とは、「いのち」を生み出す物質システムの賢さが、行動と言葉の賢さにつながることで生じる現象であり、その探究においては、上記のさまざまなレベルで生身の身体を対象に科学することが必須となる。

本年度の発表は11件であった。第一の問いを有する研究としては、「いのち」を細胞の視点で捉える研究（跡見ら）、呼吸システム（廣瀬ら）や姿勢制御（田中ら）の謎に迫る研究があった。コミュニケーションを成立させるのは言葉のみに非ず。身体は何を為すか、ひとはそれをどう活用するかを問う研究（坂井田ら）もあった。

第二の問いを有する研究を列挙する。言葉は心身を構成的につくる手段であり（諏訪）、その結果、個性（「自分らしさ」）が醸成される（中川ら）という考え方が提唱された。また、身体がなすことの暗黙性の壁に果敢に挑戦し、内部観測的に記述してみる研究（藤井ら、大塚ら）もあった。長谷川らの研究は、人が豊かに生きるために自動制御（の言語）の在り方に問いを投げかけるものである。書く行為の文化が時間概念の捉え方に影響するという篠原らの知見は、言葉と身体と時空間概念をつなぐ研究への萌芽を感じさせる。

知の身体性という研究分野はまだ新しい。一つ一つの研究が繰り出す小さな問いを積み重ね、身体性の重い扉を開く営みを辛抱強く継続しなければならない。

〔諏訪 正樹（慶應義塾大学）、

跡見 順子（東京農工大学）〕